

「ええ、人間は好き好きですから」

増山雄三

風が激しく吹き起っているのを、風速計でその強さを知ること、「顕教」であるとするれば、「密教」というのはそれとは全く異なっていて、認識や知覚を飛び越え、風は宇宙の普遍的原理の一つなので、その原理になりはてる事を、密教は目的としている。

そういう事から、密教は理解を越えた世界であり、自分が風や宇宙の原理になるのは御免なので、私は歴史随想でも書いている方を選ぶが、空海という人物は私には遠い存在であるし、かつて、彼が地球上の住人だったという事すら、感じ難いほどの距離感がある。

大和に大峰山という山があるが、そこは天台系と真言系の山伏とが、修験の聖地として修行する時、白装束と金剛杖に草鞋履きという姿で、道中で真言を唱え猥雑な会話をする

姿は異様だが、この山は、「役の行者」とい  
う怪僧が開いたといわれ、彼は空海以前の、  
雑密の徒として象徴的存在だった。  
それで、体系的密教を伝えた空海よりも、  
その先駆的存在である、役の行者の方が興味  
はあるが、雑密というのは、インドの非ア  
リアン民族の、土俗的呪文から出たものだ  
といい、その呪文を唱える山林修行者が、痛  
ましくもあり可愛らしくもある。  
十年程前に、明石の県立図書館で、空海  
全集を読もうとしたが、不学な私は六朝風  
の装飾過剰な文章は、極めて困難なもの  
とはいえず、大体の意味を想像しつつ  
読んでみた。  
それを読んだ感想は、密教という形而上  
的思考の世界は、現実性を好む中国文  
化に適合せず、やがてはそれを道教に  
残したのみで、中国から消える様に  
減んだという事である。  
そして、その形而上性や象徴性が、  
中国の文章を通して日本に運ばれ、  
日本の風土に適合したという事は、  
日本と中国の思考法の違

いを考える上で重要であるし、単に不思議でもあると思えば、いかにもそうであるが、それは、空海という巨大な論理家の媒介がなければ、とうてい根付かなかつたろう。

ところで密教は、やがて原産地のインドで「左道化」し、左道化してしまえば、密教というのは、生殖崇拜なのかと思われるが、生殖もまた風や雨と同様、法性という宇宙の普遍的原理の一表情で、その恍惚が宗教的恍惚と近似するだけに、密教を説明するのに、もつとも手近な現象だったからだ。

また、この現象を視覚化するために、歡喜仏が生まれ、左道密教が土俗化した形でのヒンズー教の、生殖礼賛の彫刻群や媾合の絵画というのは、密教を考える上で何かを暗示しているが、余談ながら、私もインドで発電所を建設した友人から、それらを描いた本を、見せて貰った事がある。

それで空海の密教は、これら左道的な未昇華のものを、その超人的な精神と論理とをも

つて、懸命に昇華しきった所に、光彩がある  
と思われるが、しかしその光彩を理解するた  
めには、逆に左道から入りこんで、遡って行  
く事も一つの方法だろう。  
また、この左道密教がチベットに入り、土  
地の土俗密教と習合してラマ教になり、さら  
に、北アジアの草原を東漸してモンゴルに入  
って、ウランバートルのラマ教寺院の僧侶達  
は、その教義が、空海の真言密教と、全く同  
じのものを学んでいるのだ。  
そしてラマ僧にとって、絶対的に崇敬せね  
ばならぬものは、その直接師だが、それは宇  
宙の普遍的原理の体现者である以上、師その  
ものが、真言密教では大日如来であり、それ  
を承ける弟子として、大日如来への拝跪の方  
法は、その師を拝む事なのである。  
それは、空海が大師信仰の中で、神格化さ  
れた事と同心円のなかにあり、顕教の最澄が  
神格化されなかった事の理由も明確にしてい  
るが、ウランバートルのラマ僧で、空海を知

っているのは、当然ながら誰もいない。

という事は、真言密教とラマ教が同心円で

あるという気分が薄らぎ、空海はラマではな

いと言わざるを得ないが、北アジアの草原か

ら空海を見れば、彼らがもし空海を自分達の

仲間であると見ても、拒否はし難いだろう。

例えば、空海の死後ほどなく、「真言立川

流」という、ラマ教に酷似した密教が、空海

の正系と称して出現し、明治維新ころまで根

強く続いた事を思うと、インドで左道化した

ように、それが出現する素地は十分ある。

この真言立川流という、性的宗教について

は、それが江戸期いっぱいまで、真言宗正統

の世界に浸透し、むしろ糜爛しきっていたの

に、明治期は研究者が少なく、高野山の学僧

だった、水原堯栄氏がいたに過ぎない。

水原氏はいかにも色白の品のよい老僧で、

しかも一生不犯と言われただけに、この人が

立川流の研究をしたとは不思議だが、立川流

について何も語らなかつたとはいえ、彼と面

談した仏教法の話聞いた事がある。

それによると、彼が訪れた水原氏の山房の庭には池があつて、その池にあつた樹木の枝に、モリアオガエルが、白い綿菓子のような巣を幾つも作つていて、蛙は種類により枝に巣を作るといふ事を、始めて知つたといふ。

それで水原氏は、立川流の要諦について具體的には何も語らずに、座敷から庭のモリアオガエルの巣を指し、「まあ、ああいうものでしような」と静かに言われたといふが、その比喻のどういふ事が「ああいうもの」なのか分らなかつたが、しかし、話を聞いている時は、なにか分かつた様な気がしたといふ。

ところで、空海はかれ自身の書いた文章が多く残つていて、それに「御遺告（ごゆいごう）」といふものがあるが、それは空海の死後ほどなく、弟子たちが書いた空海の言行について、多少は真偽の問題もあるとはいへ、それによつて、空海に少しは近づくよすがになる、といふ事が出来るものだ。

しかし空海は、なにぶんにも遠い過去の人であり、当たり前前の事だが、私は彼を見た事はないし、その人物を見た事のない遥か後世の人間が、あたかも見たようにして空海を語る事は、できそうもないだろう。

それで結局は、空海が生存した時代の事情や、その身边や思想などについてスポットをあて、その起伏を浮かびあがらせ、それを自分自身の風景としていくにつれ、空海という実体に、あるいは遇会できるかも知れない。

空海の書いた本に「性霊集」という和綴じの古い本があるが、それを、かつて本願寺の学僧だったSさんという人が、それについて明るかったので、詳しく教えてくれた。

それでも、ある時、空海は脂ぎった感じがしていたので、私はあまり空海を好きでないというのと、彼は響き返る声で、「ええ、人間は好き好きですから」といったので、何故かは、心地よかった実感を持った事がある。

令和四年三月